



国鉄新潟

NO. 707
発行
10・10月13日
国鉄労働組合
新潟地方本部
発行責任者
関川 和彦
編集責任者
教 宣 部

勝利判決をめざす

加茂暁星
非常勤講師
不当雇止め事件
10月結審



加茂暁星高校 非常勤講師不当雇止め事件の裁判報告 決起集会が9月8日18時30分より新潟市「ユソソ」で開催されました。県内各地から50名を超える、労働組合、民主団体など結集しました。
決起集会は、原告団のあいさつ原告弁護団からの報告や県内で不当雇止め撤回の闘いを展開している争議団の方々から連帯のあいさつがありました。
9月8日は、結審の予定でしたが学園側の準備書面の提出が遅れたため、9月13日に結審が予定されています。

め 九月月伸びました。



谷会長 開会あいさつ

開会あいさつでは、私学争議団支援共闘会議の谷会長から「結審



金子弁護士

非常勤講師 不当雇止めについて

3年前の2007年2月末、前校長（公立高校定年退職後の天下り）のもとで新学期直前になっていきなり専任教員の授業持ち時数を大幅に増やす提案がなされました。職員組合など教職員は、一人ひとりの生徒にゆきとどいた丁寧な教育をおこなうためには、現行の授業持ち時数を維持することが最低条件として、学校に十分な話し合いを求めました。しかし、前校長ら学園は、話し合いもそこそこに、専任教員の授業持ち時数の大幅増を一方的に強行してしまいました。

そのために、一度に12名もの非常勤講師が大量に解雇されてしまったのです。その中には25年間・17年間の長期間、加茂暁星高校の教育を担ってきた先生も含まれていました。この二人の先生は、解雇理由について前校長に納得のいく説明を求めましたが、会見さえも拒否され、契約期間満了を口実に解雇されてしまったのです。

教職員を大切にしない前校長ら学園の姿勢に対し、解雇撤回を求めるとともに、生徒も教職員も生き生きと輝く学校を取り戻すため、二人の先生は職場の組合員とともに、また、県内の私立高校の組合、地域の団体・個人の支援も受けながら裁判に訴え闘っています。

原告団からのあいさつで、山田さんは「今日、最終弁論だったが

原告団すべて やりきって勝利へ

するはずだったが、できなかった。学園側が9月2日に提出しなればならぬ準備書面を9月7日にFAXで送られてきた。主張したことがない内容が記載されていた。そのため今日、最終的な陳述ができなかった。一カ月後となったが、この一ヶ月の期間、署名行動、宣伝行動など運動を展開していく決意だ」とあいさつがありました。

勝利し学園の環境を改善させる

加茂暁星高校の長井書記長は



結審が一カ月伸びた。3年間闘ってきた、いろんなところへオールグに回った。勝利判決を勝ち取り学校へ帰りたいと思っている。赤井さんは「最終陳述の予定だった。結審できずビックリしている。3年間闘い続けてこれたのもみなさんのおかげだ。必ず勝利する」とそれぞれあいさつされました。

「我々が裁判に勝利することは学園の環境を改善させること。雇止めは学園側が勝手にやって辞めさせた。全国で支援行動が展開され全国的に闘っている労働者が沢山いる。私達の主張を認めさせること。勝利命令を勝ち取り状況を改善させる。やるべきことをすべてやりきって勝利する」とあいさつがありました。

これからの闘いについて

署名の取り組み

第4次集約で3万筆を越えた。全国へも訴え、各地から郵送で毎日届いている。

裁判傍聴の要請

傍聴席があふれるくらいにしたい。次回も多くの傍聴者の結果をお願いしたい。

裁判闘争10月13日 当日、裁判所前で宣伝行動を展開 参加の要請を。



つがありました。その後、県内の争議団の方々から連帯のあいさつがありました。その中で、ダイワハウス工業不当雇止め闘っている吉田さんは「真面目に働いている人が社会的に、差別されている。しかしその闘いの中から、パワーをもらった。昨年解雇された。いろんな方々から助言をもらって裁判闘争を展開。裁判傍聴など支援をお願いしたい」と

文芸特集

あいさつがありました。集会は最後に団結パンバロウを全体で力いっぱい行いました。

今回の「文芸特集」は鉄道川柳の平成21年9月号の山脈集推薦作品の作品を特集しました。

季節は夏から秋に移りスポーツ・文化そして食欲の秋にな

りました。

山は紅葉がはじまってきたようです。ぜひ、皆さんからの文芸投稿をお待ちしています。

詩・俳句・短歌など、いろんなジャンルを企画し特集していきたいと考えています。

現在特集する「文芸特集」は全国鉄道人連盟の御推薦作品です。



川柳集
好意
いま



山脈集推薦作品

北川 拓治 選

なりゆきでふたりは森を出たがらぬ	高橋 鬼焼	横の書を言聞かせて奥の耳	石原 真美子
横山の駅にロビー来やくれぬ	小西 雄々	目の手術あので母を探すため	奥谷川 竜太
反転を日本は八月だけのことにする	上田 千晴	廃止駅出入り自由な風へ感謝	中野 正紀
電氣椅子の座り心地を確かめる	木下 草風	脱線の前にとせどき触れてみる	田中 道博
悩め事作らぬ僕の処世術	松尾 和晋	白熊も鹿民も軌えやがて編	織屋 孤舟
対陣で母が呼んでる音がな	細 松白	ギックリ腰パントタイムと思われた	高橋 純子
リハビリはもう遠業は遠業いう	渡辺 朝風	古いの地下増の白に固執する	牛山 豊竹
わだかまり抱いて石橋の割れる音	浦井 隆	正論を飲むと崩れる蓮花火	高橋 朝風
おろおろと何もなかつた夏開しる	舟山 智恵	もう何年マッチの棒に触れてない	若松 白坊
手を伸ばすそこに耳掻きいつもめる	麻生 秋則	とりあえず笑っておこう生きるとため	熊谷 岳朗

新聞のつくりかた

言葉は記事の本文から

「見出しのつけ方」
柱に、主に、袖

では見出しの組み立てはいつなっているか、柱出しは主題に近い言葉。主見出しは、それを強調します。主見出しの字数は「7・8・9」字。袖見出しは、「主をおきなつ。袖見出しは「9・12」字。にします。見出しは2本くらい立てるのが普通です。1段の数字が10字として2段の見出しを立てたとき見出しに字数をどうするか。活字の場合は字の大きさを数字は決まっています。とにかく、天地左右が詰まってしまうのは、「ハリが強い」といって読みにくいです。

強調と省略で軽重

一つのページに複数の記事がある場合、他の記事との軽重が問われます。そこは、見出しの本数で判断していきます。

新聞社では見出しを最終的に決める部署を整理部といっています。そこで、紙面と見出しの強調、省略が行われます。



語呂の良さも大切

気をつけることは、表題ではない。文章になっている。述語の省略はある。独走、独りよがり、押し付けは駄目。記事の内容や言葉から離れない。3度、本文を読んでつけ、印刷前にもつ一度点検。こんなところだが、もつ一つ、語呂の良さといつこともあって、一度読んで忘れられない響き、口触りが大切だ。つけたら口にだして読んで見まじょう。



編集後記

今年の夏は、凄まじい猛暑でしたが、今はすっかり秋に変わりました。今月は地本定期大会が、新事務所で開催されます。多くの組合員の方々に参加していただきたいと思ひます。

